

固有名詞の取り扱いにみる国際理解
—高校教科書「英語Ⅰ・Ⅱ」の場合—

林 田 享 子

**Culture Learning Reflected in the Use of Proper Nouns
in Senior High Textbooks *English I and II***

Kyoko Hayashida

The use of proper nouns (the names of persons, places, languages, customs and festivals) in six series of senior high textbooks used in *English I and II* classes were examined in order to delineate the culture, or cultures, to be learnt.

The results show that references to American culture predominate, together with some references to the cultures of other native English-speaking countries, Europe, and non-Western countries. Although the goal seems to be to name individuals with as many nationalities as possible and to name as many countries as possible, a goal in accordance with Ministry of Education policies, the number of actual place names is incredibly small, and individuals' names often lack cultural content other than identifying their nationalities. Other features related to the use of proper names are also discussed.

Key Words : culture, proper noun, textbook

1. 調 査 目 的

「国際理解」は現行の学習指導要領の目標のキーワードである。外国語科目の目標の場合、さらにこれに「コミュニケーションを図ろうとする態度」と「言語や文化に対する関心」が加わる。授業では教科書が基本的な文化情報源である。したがって、本稿では、高校教科書『英語Ⅰ・Ⅱ』を対象に、「国際理解」に関連した文化情報の取り扱いを固有名詞の取り扱い方からとらえ、その特徴を検討した。

高校の教科書を調査対象にした理由は、中学校の教科書はすでに調査研究が行われているからである。また、大学の英語教育において文化情報の取り扱いを検討する際に、大いに参考になると考えたからである。

2. 調 査 方 法

(1) 資 料

高校の英語教科書は自由採択である。したがって、その種類は、広域採択である中学校の英語教科書に比べて格段に多い。現行の学習指導要領が施行された初年度の1994年では、中学校が7種類に対して高校教科書『英語 I』は48種類である（現代英語教育 1：宮崎 10）。この調査では、その初年度の採択冊数上位6位までの次の教科書を使用した。ここではその採択順位にしたがって列記したが、収録の表ではアルファベット順にその頭文字で記した。

Unicorn（文英堂）； Vista（三省堂）； Go, English（東京書籍）；
Milestone（啓林館）； Powwow（文英堂）； New Horizon（東京書籍）

(2) 調 査 項 目

調査項目は、固有名詞のうち人名、地名、言語名（日本語・英語を除く）、外国の風習／祭礼行事名である。人名は、さらに、「偉人・有名人」とその他の「First Name」の項目に分け、地名も「国名」と「その他の地名」に分けた。また、この調査は、コンテキストのいかに拘わらず、文法のまとめ、練習問題、欄外の例文なども含め、使用されているすべてを対象として行った。その理由は、使用されるコンテキストによる相違を確認するためである。人名と地名の項目をさらに細分化したのも、同様の理由からである。また、last name を調査項目から外した理由は、偉人・有名人以外はfirst name だけで登場している場合が多いからである。

(3) 調 査 項 目 の 分 類 基 準

人名、地名は、地域による取り扱いの相違を確認するために、英語圏とその他の6地域に分類した。両者の分類基準は次の通りである。

【人名】 「偉人・有名人」の判定は、世間一般の認識の基準による。偉人・有名人とは、いわゆる時の人や歴史上の人物であるが、注の説明がないと出身国が判定できないような科学者や冒険家も登場している。この場合にも、評価に値する人物として登場しているので、この範疇に入れた。また、「First Name」の範疇には、偉人・有名人以外のすべての登場人物の名前を分類した。偉人・有名人と某かの係わりをもつ人物、たとえば友人や兄弟といった人物もこの範疇である。また、物語の登場人物は、たとえその名前がよく知られていても、実在の人物ではないのでこの範疇に入れた。

【地名】 国名の範疇には、Americanのように、国を表す名詞の形容詞形も含め、都市名のみが使用されていても、その都市が位置する国と見なしてこの範疇に入れた。また、地域名は、複数の国にわたるものは「国名」に分類した。複数の国に及ぶ川、山脈、また、その山

固有名詞の取り扱いにみる国際理解

脈の一角を成す個々の山の名前も同じ扱いをした。特定の国内に位置する地域名は「その他の地名」の範疇である。

(4) 留意点

文化情報の取り扱いには、英語科目に特有な問題がある。この調査では特に次の2点に留意した。

その一つは、英語圏の文化の多様性の取り扱いである。英語圏には複数の国が存在するため、英語圏のどの国をどのように扱うかが、学習者の国際理解の認識の形成に係わってくる。英語圏の特定の国の文化理解を中心に指導した場合、その国を中心に据えた「国際理解」の枠組みを学習者に与えることになる。この点でどのような配慮が見られるのだろうか。これを確認するために英語圏の国々の取り扱いには特に留意した。

もう1点は、外国語の取り扱い方である。学習指導要領には「言語と文化に対する関心を高め」とあるが、現状では、英語以外の外国語科目を開設している学校は極めて少数である。1995年では、高校総数5501校中、中国語：192校、フランス語：147校、ドイツ語：75校、朝鮮・韓国語：73校、スペイン語：43校、ロシア語：20校、イタリア語：5校、ポルトガル語：2校である（清水他 8, 282）。この状況下で、英語以外の外国語は、どのように扱われているのであろうか。また、国際共通語として英語を認識させることは意図されているのであろうか。調査項目に言語名を入れたのは、この確認のためである。

3. 調査結果

日本の人名、地名は、各教科書共に相当数使用しているが、ここでは偉人・有名人の名前だけを取り上げる。

(1) 人名

【偉人・有名人】 偉人・有名人の数は、各教科書共に、英語圏が最も多く、次にヨーロッパである（表1）。この両方で総数の大方を占める。また、英語圏では、そのほとんどがアメリカ人かイギリス人である。6種類中1種類ではイギリス人が多いが、3種類では、アメリカ人がイギリス人の2倍以上の人数で登場している。

2種類以上の教科書に登場する人物の場合にも、教科書別と同様の傾向にある（表2）。登場人物を個別に見ると、取り上げる教科書が最も多いのが、人種差別と闘い公民権運動を展開したアメリカのキング牧師である。6種類中5種類に登場している。また、人数が最も多いアメリカの場合、半数近くが大統領に就任した人物で、その他は、詩人、映画監督、野球選手など多様な領域にわたっている。次に人数が多いイギリスは、そのほとんどが文学や音楽といった芸術畑の人物である。一方、ヨーロッパの5人中1人は、アメリカ大陸発見の歴史に係わりのある人物である。また、3人は、平和・福祉といった人類の普遍的問題に係

表 1 教科書別偉人・有名人の数

	G	H	M	P	U	V
US	6	12	10	19	14	2
UK	2	12	7	4	6+1P*	4
Ausl	-	1	-	-	-	-
Ca	-	1	-	1	-	-
IR	-	2	-	-	-	-
NZ	-	-	-	-	-	-
Eu	7	5	9	7	7+1P	6
As	1	-	-	-	1	-
Af	-	-	2	1	-	-
ME	-	-	-	-	-	-
CA	-	-	-	-	-	-
SA	-	-	-	3	-	-
計	16	33	28	35	28+2P	12
J	2	1	-	1	7	-

〈注〉・IとIIに同一人物が登場している場合には、1名と数えた。

・Pの教科書に冒険家として登場した Aden, Brian, Chris の国籍が不明。名前からイギリスもしくはアメリカと考えられるが、この表の数値には含まれていない。

*1Pは、本文中ではなく、名前入りの挿入写真もしくは作者名入りの挿入の絵で登場した課が1課あるという意。他表でも同様。

わりがある人物である。そのうち2人は第2次大戦中のユダヤ人迫害の関係者で、その迫害の首謀者であるヒトラーは、6種類中4種類もの教科書に登場している。日本人で2種類の教科書に登場する杉原は、その迫害を受けた人々に援助の手を差し伸べた人物である。欧米以外では、この杉原と、国の内外で人命に係わる医学の研究を続けた野口英世、そして、インド独立運動で武器と暴力を否定する無抵抗主義で闘ったガンジーのみである。

教科書1種類だけに登場する人物の場合、少数ではあるが、アメリカ、イギリス以外の英語圏出身者が含まれている(表3)。その5人中4人は、詩人もしくは小説家である。一方、ヨーロッパ出身者の領域は科学、芸術、文学の多岐にわたっている。また、人数では、フランス、ロシアが多い。ロシアの場合には、その半数が宇宙飛行士である。日本を除くアジア、アフリカ地域は各1名で、両者共に日本在住の人物である。また、中東では古代エジプトの歴史上の人物、南米では先住民の人権と環境保護を擁護した人物があがっている。

【First Name】 アメリカ、イギリス以外の英語圏の人名は、6種類中5種類の教科書で2課以上に登場している(表4)¹⁾。また、少なくともその1つが、4種類の教科書で頻出順位4位までに入っている。1種類では、1位がオーストラリア人である。英語圏以外では、1種類の教科書で、エジプト人、メキシコ人、中国人が連続する2課にわたって登場し、別の1

固有名詞の取り扱いにみる国際理解

表2 偉人・有名人：教科書2種類以上

教科書 種類数			
5	US		Martin Luther King, Jr.
4	US		Abraham Lincoln
*3+1	US		John F. Kennedy
2	US		Langston Hughes
2	US		Jefferson
2	US		Donald Keene
2	US		Helen Keller
2	US		Jackie Robinson
**2	US		Roosevelt
2	US		Steven Spielberg
3	UK		Shakespeare
2	UK		the Beatles
2	UK		John Lennon
2	UK		Paul McCartney
2	UK		Beatrix Potter
2	UK		Robert F. Scott
Eu			
4	Ger		Adolf Hitler
3	Ys		Mother Teresa
***2+1P	Aus		Mozart
2	NL		Anne Frank
2	It		Christopher Columbus
As			
2	Ind		Mahatma Gandhi
2	J		Hideyo Noguchi
2	J		Chiune Sugihara

〈注〉*1種類の教科書に、写真と解説文による名前当てクイズで登場。ただし、正解の人物にはなっていない。

**1種類に夫人名で登場。

***1種類に、名前入り挿入写真で登場。

表3 US/UK 以外の偉人・有名人：教科書1種類

Ausl		Judith Write
Ca		Rollie (Ranolf) D.Innes-Taylor
Ca		Lucy Maud Montgomery
IR		James Joyce
IR		James Stevens
Eu	RE	Julius Caesar
	*Aus	エヴァ・シュロツス
	Fr	J.F. Champollion
Fr (Pol)		Marie Curie
	Fr	J.B. Fourier
	Fr	Louis XVI
	Fr	Napoleon
	Fr	Jacques-Yves Cousteau
	Fr	La Fontaine
	Fr	Paul Gauguin
	Fr	Edgard Vare'se
	Fr	ジャン・ジオノ
	Ger	Bach
	Ger	Albert Einstein
	Hun	Liszt
	It	Galileo
	NL	Van Gogh
	Nor	Roald Amundsen
	Pol	Chopin
	Ru	Aleksandr Aleksandrov
	Ru	Chekhov
	Ru	Yuri Glazkov
	Ru	Nijinsky
	Ru	Pavel Popovich
	Ru	Stanislavski
	Sp	Pablo Picasso
	Swe	AHBA
As	SL	ウイツキー
Af	Gu	Ousman Sankhon
ME	Eg	Cleopatra
	Eg	Ptolmys
SA	Br	Claudio
	Br	Orlando
	Br	Candido Rondon
	J	Soseki
	J	Kenichi Horie
	J	Akira Kurosawa
	J	Shirase
	J	Tokugawa
	J	Toyotomi
	J	毛利衛
	J	坂本 龍一

〈注〉*日本語表記の名前は、教科書に日本語表記で登場した名前。他表の日本語表記も同様。

*アンネ・フランクと同様の体験をした人物。

表4 教科書別 First Name の頻出順位

Go			NH			M		
順位	課数		順位	課数		順位	課数	
1	6	US Bill	1	13	UK John	1	15	Tom
*2	5	Ca Thomas (Tom)	1	13	UK Mary	2	14	Ben (Benjamine)
2	5	US Robert (Bob)	3	9	Ca Tom	2	14	Jim
4	4	Jane	*4	7	US, Ausl Bob	4	13	John
4	4	US John	5	6	UK Bill	5	12	US Mary
4	4	US Judy	5	6	Jane	6	9	US Ann
4	4	US Mike	7	4	UK Anne, Ann	7	7	Bill
4	4	US Nancy	*7	3	IR Jim	7	7	Bob
9	3	US Mary	9	3	Jack	9	6	Sue, Susie, Susan
9	3	Sallie	9	3	UK Kathy	10	4	Cathy, Catherine
***10	2	Eg Ali	9	3	Linda	10	4	UK Mike
***10	2	Mex Carmen	9	3	Susan			
10	2	US Cathy						
**10	2	G Karl						
10	2	Ru Marsha						
***10	2	Chi Mei Ling						
P			U			V		
1	11	US Tom	1	16	US John	*1	12	Ausl Steve
2	9	UK Nancy	1	16	US Kate	2	11	US Julie
3	5	Bob	3	4	US Mary	3	8	Tom
*4	4	US,Ca Ann, Anne	**4	3	UK,NL Peter	4	6	Anne
*4	4	US,NZ Jim	5	2	US Caroline, Carol	4	6	Susan, Susie
6	3	Bulg Cathy	5	2	US David	*6	4	Sing Li Wong
7	2	US Dan	*5	2	Ausl Nancy	6	4	Mary
*7	2	Ca Gregory	5	2	Tom	6	4	Phil
**7	2	Den Hans				9	3	Jack
7	2	US John				9	3	John
*7	2	Ca Lucy				*9	3	NZ Nancy
7	2	US Patricia				9	3	Ted
7	2	Ted						

〈注〉・表中の名前は、基本的に各教科書で登場する課数の多さで上位10個までの名前である。ただし、1課だけに登場する名前は含んでいない。また、10個目に登場課数が同じ名前が複数個ある場合には、これをすべて含んでいる。

* US, UK 以外の英語圏：** Europe：*** その他の地域。

種類では、シンガポール人が4課にわたって登場している²⁾。多数の課に登場する人物の場合、ほとんどの教科書がその国籍を記している。

2種類以上の教科書に登場する人物は、英語圏出身者が圧倒的多数である(表5)。英語圏以外の人名と国籍は次の通りである。

〈男性名〉 Carlos：ブラジル，メキシコ

Chris：フランス

Li：中国，シンガポール

〈女性名〉 Cathy：ベルギー

Carmen：メキシコ，スペイン

Marsha：ロシア

表5 2種類以上の教科書が使用する First Name

教科書 種類数	男性名						教科書 種類数	女性名					
	G	H	M	P	U	V		G	H	M	P	U	V
6 John	○	○	○	○	○	○	6 Mary	○	○	○	○	○	○
6 Tom, Thomas	○	○	○	○	○	○	5 Ann, Anne (UVH)		○	○	○	○	○
5 Bob	○	○	○	○	○		5 Nancy	○		○	○	○	○
4 Bill	○	○	○			○	4 Cathy (M), Catherine (M), Kathy	○	○	○	○		
4 George			○	○	○	○	4 Jane	○	○	○		○	
4 Jim	○	○	○	○			3 Alice		○	○			○
4 Peter (U:Peter Pan)		○		○	○	○	3 Kate (G:ケート)	○				○	○
3 Carlos (M:カルロス)	○		○	○			3 Susan, Sue, Susie		○	○			○
3 Chris	○	○	○				2 Carmen	○			○		
3 Jack		○	○		○		2 Judy	○	○				
3 Mike	○	○	○				2 Karen			○		○	
3 Pete (U:牛の名前)		○	○		○		2 Linda		○	○			
2 Ben, Benjamine			○		○		2 Lucy		○			○	
2 David			○		○		2 Marsha	○		○			
2 Ed, Edward		○	○				2 Patsy, Patricia			○	○		
2 Harry			○		○								
2 Homer				○	○								
2 Kim	○		○										
2 Li				○		○							
2 Mark			○	○									
2 Steve			○			○							
2 Ted				○		○							

ただし、これらの名前を使用するすべての教科書が、その国籍を記しているわけではない。Carlosは、1種類が明示しないままである。また、ChrisとCathyは1種類が上述の扱いをしているだけで、あとは不明なままか英語圏の人名として使用している。Marshaの場合にも1種類は不明である。

教科書1種類だけに登場する人名は、国籍が記されていない場合、そのほとんどが英語圏の人名である。英語圏以外の場合には、どの教科書もその国籍を必ず明示している。

(2) 地名

【国名】 最も多くの課に登場する国は、6種類中5種類がアメリカである(表6)。1種類は、IIでイギリスが1課分多い。アメリカ、イギリス以外の英語圏では、オーストラリアとカナダが6種類すべての教科書に登場している。また、カナダは、3種類の教科書のIで、登場する課がイギリスと同数かそれ以上であり、オーストラリアは1種類の教科書で、イギリスより1課分多く登場している。教科書によっては、アイルランド、ニュージーランドも登場している。ただし、この場合、登場する課は1課に限定されている。

英語圏以外では、各教科書共に、ヨーロッパ、アジアの地名が多数を占める。両者を比較すると、課数では、アジアが1種類の教科書のI、IIで上回っているが、国の数では、同数

表6 教科書別・地域別／教科書に登場する国の数

	G		H		M		P		U		V	
	I	II	I	II	I	II	I	II	I	II	I	II
US	5	11	11	7	12	7	9	8	10	10	6	6
UK	1	1	2	4	5	8	5	3	4	7	4	3
Ausl	1	1	1	1	4	5	4	1	2	—	5	3
Ca	4	1	—	2	3	—	5	1	2	1	4	—
IR	—	—	—	1	1	—	—	—	—	1	—	—
NZ	1	—	—	1	—	1	1	—	—	—	1	—
Eu	4 (6)	7 (8)	6 (6)	3 (6)	5 (10)	4 (6)	4 (3)	8 (9)	5 (4)	9 (6)	3 (1)	4 (8)
As	2 (2)	4 (4)	3 (5)	4 (2)	8 (10)	8 (7)	3 (3)	5 (4)	3 (3)	5 (3)	6 (3)	1 (—)
Af	1 (1)	2 (1)	— (—)	2 (—)	3 (1)	3 (1)	3 (1)	2 (2)	1 (2)	1 (—)	2 (1)	2 (1)
ME	2 (2)	2 (2)	— (—)	1 (1)	2 (1)	1 (—)	2 (1)	2 (2)	1 (1)	— (—)	— (—)	— (—)
CA	2 (1)	1 (1)	— (—)	— (—)	1 (1)	— (—)	1 (—)	— (—)	1 (1)	— (—)	— (—)	1 (1)
SA	1 (—)	— (—)	1 (2)	2 (2)	3 (2)	2 (1)	2 (1)	1 (1)	1 (1)	— (—)	— (—)	— (—)

〈注〉数値は、出てくる課の合計数。()内は、国の数。

かヨーロッパが多い。2種類以上の教科書に登場する国の場合には、ヨーロッパが最も多く、次にアジアである(表7)。さらに、この2つの地域のうち、扱う教科書数が多いのは、ヨーロッパの国である。4種類以上の教科書に登場する国は、ヨーロッパが7カ国に対してアジアは2カ国に過ぎない。その他の地域は、教科書によってかなりばらつきがある。教科書によっては全く登場しない地域もある。

【その他の地名】 2種類以上の教科書が使用する国内の地名は、アメリカが圧倒的多数である(表8, 9)。次にイギリス、オーストラリアの順である。カナダは、オーストラリアと共に6種類すべての教科書に登場するが、国内の地名で2種類以上の教科書に登場する地名はない。オーストラリアの場合にもその数はわずかである³⁾。

英語圏以外では、2種類以上の教科書に登場する国内の地名は、英語圏に比べ、かなり限定される。5種類の教科書がパリを使用し、アムステルダム、ウィーン、チェルノブイリ、ローマ、ジャカルタをそれぞれ2種類が使用している。全6都市中5都市がヨーロッパの都市である。

1種類だけに登場する地名もまた、アメリカ、イギリス以外の国々の場合、非常に限られている(表10, 11)。写真だけに登場する地名も多い。

固有名詞の取り扱いにみる国際理解

表7 教科書に登場する英語圏以外の国

教科書 種類数	EUROPE	ASIA	AFRICA	ME	CA	SA	その他
6	Europe* France Russia	China	Africa*				
5	Germany (+1P) Spain	Asia (Southeast Asiaを含む)* India					Planet Earth
4	Greece Italy Poland						Atlantic Ocean
3	Belgium (+1P) Netherland	Indonesia Singapore (+1P) Thailand (+1P)	Ethiopia	Egypt	Mexico (+1P)	Amazon* Brazil	Mars Pacific Ocean Western
2	Mediterranean* Austria Denmark Lithuania Norway Sweden	Philippines Sri Lanka Taiwan	Guinea Kenya (+1P) **	Israel		Andes* Indians* South America* Argentine Peru	Antarctic New World North America North Sea
小計	14	8	3	2	1	3	
1	English Channel* Old World* Scandinavia* Cyprus Czech Finland Slovakia ブルガリア Romania (P) ハンガリー (P) スイス (P)	Himalayas* Mt.Chomolungma* Mt.Everest* Mt.Kanchenjugh* Annapurna* マチャプチャリ (P)* Indies* Sea of Japan* South China Sea* Bangladesh Korea Laos Malaysia (+1P) Myanmar Nepal Vietnam	Congo (River) * Kalahari desert* Nile (River/Valley)* Sahara* Zambezi River* Mt.Kilimanjaro (P)* Nigeria (+1P) Niger Uganda Zambian Burkina Faso (P) Somalia (2P) Sudan (2P) Tanzania (P)	Middle East* Persian Gulf* Kwait Saudi Arabia イラン	Costa Rica	Guyana ボリビア	American continent Angles Bering Sea Caucasian Celtic Eurasia Arab Islamic countries Jupiter Milky Way NASA Venus Arctic Equator North Pole South Pole 南半球 北半球
小計	5 (+3)	7	4 (+4)	3	1	2	
合計	19 (+3)	15	7 (+4)	5	2	5	

〈注〉・定冠詞の the はすべて省略。

*地域, 山脈 (山を含む), 川の名前。

**P1は1種類の教科書の見開きの写真に登場の意。

Tonga (P)

表 8 その他の地名：英語圏／教科書 2 種類以上

国名	教科書 種類数	地名	種類数	地名	国名	教科書 種類数	地名
US	6	New York	2	Hollywood	US	6	London
	5+1P	California	2	Honolulu		4	England
	5	Hawaii	2	Louisiana		2	Oxford
	4	Washington	2	Michigan		2	Scotland
	3+1P	Chicago	2	New England		2	the Lake District
	3+1P	San Francisco	2	New Hampshire		2	the Thames
	3	Alabama	2	New Orleans	Ausl	4	Sidney
	3	Boston	2	Ohio		2	Ayers Rock
	3	Montgomery	2	Philadelphia		1+1P	Melbourne
	3	the Mississippi	2	Seattle			
	3	Washington, D.C.	2	the South			
	2+1P	Alaska	1+1P	the Yukon River/Territory			
	2	Cincinnati	1+1P	Arizona			
	2	Florida	1+1P	Texas			
	2	Georgia	1+1P	the Rockies			
				Wisconsin			

表 9 その他の地名：US・UK／教科書別登場課数 2 課以上

教科書	登場 課数	国名	地名	教科書	登場 課数	国名	地名
G	3+1P	US	New York	P	5	UK	London
	1+1P	UK	London		4	US	New York City/State
H	5	US	New York/City		2	US	New England
	3	UK	London		2	US	Hawaii
	2	US	Boston		2	UK	England
	2	US	Washington		1+1P	US	California
	1+1P	US	Hawaii	U	10	US	New York/City
M	5	US	New York		6	UK	London
	5	UK	London		5	UK	England
	4	UK	England		4	US	California
	2	US	California		2	US	Alaska
	2	US	Hollywood		2	US	Central Park
	2	UK	Oxford		2	US	Los Angeles
	2	US	San Francisco	V	5+1P	US	New York
	2	UK	Thames		4	US	California
					4	UK	England
					2	UK	London
					2	UK	Scotland

表10 その他の地名：
Ca・Ausl／教科書 1 種類

国名	地名
Ca	Ontario
	the Ogilvie Mountains
	Prince Edward Island
	アルバータ州
	エドモントン
	ドーソンシティ
	Banff (P)
	Lake Louise (P)
	Nothern Territory (P)
	the Rocky Mountains (P)
	Vancouver (P)
Ausl	Gold Coast
	the Grampians
	Perth, W. Austrl (P)

〈注〉定冠詞のtheはすべて省略。

表11 その他の地名：英語圏以外／教科書1種類

EUROPE		ASIA		AFRICA	
Aus	Salzburg	Chin	Beijing	Gu	Boffa
Belg	Brugge		Hong Kong	Ken	アンセボリ国立公園 (P)
	Brussel		Tibet	NIG	ニアメ (P)
Den	Copenhagen		中国広西省 (P)		アガデス (P)
	エーデルフツ (P)	Ind	Bhopal		
Fr	Loire River		Madras (P)		
	Seine River (P)	Kor	Seoul		
Ger	Berlin	Nep	Kathmandu		
	Munich	RI	Java	ME	
	アウシュビッツ		Solo		Middle East
Gr	Crete	Tai	Tainan		Persian Gulf
	Minoan ruins		Taipei	Eg	Rossetta
	Palace of Knossos	Thai	Bangkok		Cairo
	Panthenon	SL	Anuradahapura (P)	Is	エルサレム
It	Florence		Polonnaruwa (P)		
	Ponti				
Lith	Kaunas (+1P)			SA	
	Newman River (P)				Mt. Roraima (P)
NL	Breda				イグアスの滝 (P)
	Amstel Canal (P)				Rio de Janeiro (+1P)
	デンヘルデン (P)			Br	Georgetown
Rus	キエフ			Guy	Chincero (P)
	ウクライナ			PE	
	モスクワ				
Sp	Madrid				
	Pamplona				
	Seville (P)				
	Segaovia (P)				
Swe	Lake Vanern				
	Zealand				

〈注〉定冠詞のtheはすべて省略。

(3) 言語名

教科書に登場する日本語・英語以外の言語名、その言語名を取り上げた教科書数、また、教科書が明記するその言語の使用国名を表12に示した。使用国名の後の()内の数値は、その国名を記す教科書数である。

カナダのフランス語使用を3種類の教科書が提示している。また、ベルギーのフランス語、シンガポールの中国語のように、言語名と国名が同一の語幹を共有しない組み合わせの言語使用を、3種類の教科書が提示している。アジアの言語では3言語があがっているが、2種類以上の教科書が取り上げる言語は中国語だけである。その他には、1種類の教科書が、古代エジプト文字を取り上げ、African languages, European languages, Egyptian languagesといった総称的な名称を用いているに過ぎない。

一方、教科書によっては、国内で複数の言語が使用される状況を紹介している。1種類は、

表12 教科書に登場する言語名

教科書 種類数	言語名	使用国
6	French :	Canada (3), France (2), Guinea (1) Belgium (1)
5	Chinese :	China (3), Singapore (1)
4	German :	Germany (1), Belgium (1)
3	Spanish :	Mexico (1), Spain (1), Peru & Spanish Speaking-countries (1)
2	Arabic, Russian	
1	Bahasa Indonesia :	Indonesia
	Greek, Italian, Korean, Latin, Thai	

インドネシアの国内で216言語が使用されていて、国語がBahasa Indonesiaであると説明している。また、もう1種類は、中国語の話者であるシンガポール人の留学生を登場させて、言語も文化も異なる人々が共に暮らす本国の状況を語らせている。

英語圏以外の英語使用に関しては、上述の教科書が、シンガポールの国内共通語であることに言及している。また、別の1種類の教科書がザンビアの公用語であることに触れ、もう1種類が、第1言語もしくは第2言語として使用する国々を地図で示している。

(4) 風習／祭礼行事名

英語圏であるかどうかを問わず、教科書が扱う風習／祭礼行事は極めて少数である。英語圏の場合、クリスマスが5種類に、新年とハロウィーンのそれぞれが3種類に登場している。その他には、Homecoming, Mother's Day, Father's Day, St. Valentine's Day, Thanks-giving, Easterがそれぞれ1種類に登場するに過ぎない。

英語圏以外では、1種類の教科書が、アメリカ、ヨーロッパ3カ国、アフリカ1カ国、アジア1カ国、中米1カ国の風習を、また、もう1種類がスペインのお祭りを取り上げている。

4. 話題による取り扱いの相違

教科書が国、人物を登場させる方法は、概ね次の5通りである。課によっては、このいくつかを組み合わせた方法を採用している。(1)から(4)までは、本文中の方法である。ここでは、この分類を枠組みとして、話題との関連性から取り扱いの特徴を述べる。

- (1) 1カ国を取り上げて話題にする
- (2) 特定の国を舞台にした物語をリーディングの教材にする
- (3) 特定の話題に関して複数の国／複数の国の出身者を登場させる
- (4) 日本在住の外国人留学生／社会人, AET, 海外の日本人留学生を登場させる
- (5) 文法のまとめ, 練習問題, 欄外の説明など, 本文外の箇所を使用する

【1の方法】 この方法で、各教科書の多くの課が本文の話題を提示している。最もよく取り上げられる国はアメリカ、次にイギリスである。例外的に、イギリスを分冊Ⅱでより多く取り上げる教科書が1種類ある。その他の国では、ブラジルとカナダをそれぞれ2種類の教科書が、シンガポール、オーストラリアをそれぞれ1種類が取り上げている。また、1種類の教科書は、文化紹介のコーナーを設け、Ⅰ、Ⅱにそれぞれ5カ国を登場させ、日本との比較も行っている。ただし、取り上げる国には地域的に偏りがある。英語圏では、アメリカ、イギリスの外にニュージーランド、残り7カ国中5カ国がヨーロッパ、アジアと南米は、中国、ブラジルの各1カ国である。

この方法で提示する話題は、大きく2種類に分類される。その話題は、取り上げた国に固有な話題か、もしくは、人類に普遍的ではあるが、世界規模での協力を必ずしも必要としない話題である。後者は、たとえば人権問題や障害者の話題で、必ずしも特定の国の特定の人物を取り上げる必然性はない。しかし、特定の国を取り上げるので、その国に固有な文化・社会状況も提示される。キング牧師やジャッキー・ロビンソンの話題がこの例である。

教科書によっては、話題が挿絵、登場人物名、内容などから欧米の文化であると分かっていても、背景になっている国があいまいな課もある。

【2の方法】 最近では、英文学ではなく、英語文学という表現も耳にするが、この調査に使用した高校教科書では、アメリカ、イギリスの物語が多数を占める。この両者だけ、あるいは、アメリカの物語だけを扱う教科書もある。少数ではあるが、教科書によって、グリム童話やギリシャ神話といった古典物のほかに、カナダ、アイルランド、インドの物語を取り上げている。ただし、インドの場合、ヒマラヤ山脈の山の名前は登場するが、本文だけではどこの国が舞台なのか判別できない。

【3の方法】 この方法で日本を含む多数の国とその人物が登場している。まず、話題が人類に普遍的な問題でその解決には世界的な協力が必要な場合である。環境問題、戦争と平和の問題の場合、6種類すべてが採用している。登場する地域は、環境問題の場合は教科書によって異なる。アメリカとヨーロッパ諸国の場合もあれば、南米やアフリカだけの場合もある。一方、戦争問題に関連して登場する国は、日本とヨーロッパ諸国に限られる。話題は、日本の場合には被爆／者の話、ヨーロッパの場合には大戦中に迫害を受けたユダヤ人の話である。また、海外援助の話題は、3種類の教科書が取り上げている。登場する国はアフリカとアジアの国々である。そのうち1種類は、日本政府の海外援助のあり方を疑問視し、現地の実状に即した援助のあり方を提起している。

もっぱら世界的協力を訴えるために、地球人の視点を提示する教科書もある。1種類の教科書は、この視点から5カ国の子供達を書いたメッセージを載せている。そのうち1人は本国の貧困と救援活動を話題にしているが、あとは抽象的に世界平和と協力を願う内容で、国籍以外は背景にある文化／社会が浮かび上がってこない。宇宙の話もまた、この視点を提示

する話題であり、3種類の教科書が取り上げている。

次に、複数の文化を比較する場合である。話題として、生活のペース、ボディランゲージ、夏、ユーレイルパス、性別役割を、それぞれ1種類の教科書が取り上げている。また、1種類の教科書は、6カ国の子供達に自国の風習を紹介させている。比較対象は、ユーレイルパス以外、多様な地域にわたっている。日本在住の複数の留学生に日本についてコメントさせている教科書もあるが、この場合、その個々の人物の文化には触れていない。また、本文中でクリスマスと新年が話題に上ったことに関連してか、見開きに世界各地の祭礼行事の写真を一括して掲載する教科書もある。

英米もしくは欧米の文化理解を深めるために、関連のある複数の国を登場させる教科書もある。ポテトや紅茶にまつわる話がこの例である。

また、この方法で、国際共通語としての英語を話題にする教科書もある。1種類の教科書は、英語圏の4カ国の出身者が英語学習について日本人の学習者に宛てたメッセージを載せている。その中で、2人がこの英語の役割に触れている。また、1種類は、これをテーマとして、アジアを含む5カ国の子供たちからのメッセージを載せ、もう1種類は、日本を含む6カ国の子供たちを2課にわたって登場させ、話題にしている。両者共に、人名、国籍を明示しているが、それ以外の文化情報は、後者が各人の使用言語名を記しているに過ぎない。

【4の方法】 どの教科書もこの方法を採用している。留学生/AETの出身国と日本人の留学先は、英語圏では、アメリカ、オーストラリア、カナダ、ニュージーランドである。イギリス、アイルランドは含まれていない。英語圏以外ではシンガポール人の留学生が登場する教科書がある。また、実在の日本在住の外国人が、3の方法で述べた教科書も含め2種類の教科書に登場している。その国籍は、地域別で、アジア、アフリカが多い。

この方法を採用する教科書は、内容にある種の一貫性をもたせ、心理的に親近感をもたせるプラスの効果をねらってか、特定の人物を一貫して登場させている。その方法として、2種類の教科書は、会話コーナーの箇所では英語圏出身の留学生と日本人の高校生、もしくは、アメリカと日本を舞台に双方の留学生とホストファミリー、という状況を設定している。日本人と〇〇人という設定の会話形式は、残り4種類のうち3種類も採用している。そのうち1種類には、日本人同志が英語で会話をする場面もあるが、別の1種類では、各国の文化紹介コーナーで、英語圏と英語圏以外の出身者の双方が会話の相手になっている。

【5の方法】 本文外の固有名詞は、(1) 同じ課の本文中に登場したか、(2) 他の課の本文中に登場するか、(3) どの課の本文中にも登場しないか、のいずれかである。本文外では、(1)の固有名詞の使用が一般的である。

First Nameの場合、どの教科書も、本文中の名前を多用している。また、その名前は、1種類の教科書が使用するカルロスを除き、すべて日本か英語圏の人名である。

国の場合には、使用する教科書数と課数が最も多いのはアメリカで、次にイギリスである。

固有名詞の取り扱いにみる国際理解

その他の国々と使用教科書数は、表13の通りである。()内の数値は、同じ分冊中のどの本文中でも使用せず、本文外だけで使用している教科書数である。ただし、ボリビアとペルーの1種類は、同じ課の本文のポテトの話題に関連した説明文の中で使用している。

表13 本文外で使用される国々

教科書 種類数	英語圏 (US・UK以外)	英語圏以外
5	カナダ (1)	フランス (1)
4		中国 (1)
3	オーストラリア	シンガポール (2)
2		ケニア (2), スペイン (1), タイ (2), ペルー (2)
1		イタリア, オーストリア, ノルウェー (1), インド, 韓国, 台湾 (1), バングラデシュ, ブラジル, ボリビア (1)

国内の地名で、2種類以上の教科書が使用する地名は極少数である。その地名と使用教科書数は次の通りである：ニューヨーク：6 (4)，ロンドン：5 (3)，カリフォルニア：3 (1)，シドニー：2 (2)，テムズ川：2 (1)，ハワイ：2 (2)。()内の数値は、同じ分冊中のどの本文にも登場しない教科書数である。ハワイとシドニーは、使用する教科書の2種類共、本文外だけで使用している。英語圏以外では、2種類以上の教科書が使用するのはいずれも1種類である。4種類が使用しているが、そのうち3種類では同じ分冊中のどの本文にも登場していない。

英語以外の外国語名に関しては、前述の調査結果の箇所であげた言語のうち、本文中の使用の有無に拘わらず、本文外で最も頻繁に使用されるのはフランス語である。6種類すべてが使用している。また、同じ分冊中のどの本文中にも無いが、本文外だけで使用される言語名は、中国語：2種類、ドイツ語：2種類、スペイン語：1種類、アラビア語：1種類、タイ語：1種類である。

5. 総 評

今回調査した高校教科書は、教科書間で多少の違いはあるが、明らかにアメリカの文化理解に重点を置く内容である。登場する国と登場人物の出身国で、課数、教科書数共に最も多いのはアメリカで、次にイギリスである。教科書が本文中の話題として取り上げる国も同様である。また、その他の英語圏の国々やシンガポールを取り上げる傾向もかなり強い。ただし、この場合、国名やfirst nameがたびたび登場する割には、話題として取り上げる割合が少ない。また、国や地域によって、取り上げる偉人・有名人の領域や話題の種類にも違いがある。両者共に、最も多様性に富んでいるのはアメリカである。

英語圏とヨーロッパの出身者のfirst nameは、その他の地域の出身者に比べて、出身国が不明なまま使用されるものが多い。また、教科書によっては、いわゆる欧米文化の内容であると分かっていても、どの国の文化であるのか特定できないものがある。これは、一つには、英語の歴史や英語圏の国々の移民の歴史の経緯から、英語圏とヨーロッパ出身者の名前や文化が、もともと明確には分けられないからであろう。

調査結果では、ヨーロッパの国々や人物を取り上げる割合が多い。アメリカもしくは英語圏の文化理解が中心であれば、同様の理由で、これも当然である。また、一つには、明示しなくても、学習者が当然英語圏の人名と見なすことが予想されるからであろう。ポピュラーな英語の人名は、中学の教科書や映画、テレビ、雑誌など、学習者の周りに散在している。英語の人名は、その他の言語の人名に比べると、学習者にとっては格段に馴染みのある名前である。

その一方で、英語圏とヨーロッパ以外の場合には、その国籍を必ず明示している。これは、「国際理解」の目標を考慮し、学習者の馴染みが薄い欧米以外の国々の存在を強調するためであろう。アメリカ、イギリス以外の英語圏の場合にも、登場人物の国籍を明示して、複数の課で使用する傾向がある。たびたび批判されてきた従来の英語＝アメリカ＝外国の図式をいささかなりとも変える試みである。

話題が人類に普遍な問題でその解決に世界的な協力が必要な場合に、多数の国が登場している。異文化理解が英語圏を中心とした内容の構成なので、英語圏／ヨーロッパ以外の地域の場合、その問題と世界的協力の必要性の認識だけを強調する傾向が強い。どの教科書もこの話題を扱っている。収録の表には無いが、3種類の教科書がUnited Nations、2種類がNobel Prizeを使用しており、FAO、globalism、JOCV、Olympics、Red Cross Hospital、UNESCOといった語も登場している。

同じように人名を提示するにしても、1種類の教科書は、異文化相対主義の立場から、日本人の姓名を英語の語順にせずそのまま用いている。しかし、これは例外的で、どの教科書も背景にある文化の取り扱いはともかく、人名と国籍または国名をできるだけ多く提示しようとする傾向が見られる。紙面や本文の内容の都合上か、写真だけに登場する国も多い。これは、世界的な協力の必要性を強調するためであろう。しかし、国家、民族、言語の境界は、一致するのが稀である。また、文化も国と境界を一にするわけではない。教科書に登場する偉人・有名人にしても出身国と国籍が必ずしも同じ人物ばかりではない。こういった点が背景に追いやられ、返って国単位での認識もしくは思考が殊更強調される結果になっている印象も受ける。

人名、地名をできるだけ導入するための一つの手段と考えられているのか、本文の内外で日本語表記だけで人名、地名を用いている教科書がある。英語圏以外の人名、地名の場合、アルファベットに綴り変えても、どう発音すべきかという問題がある。現地の使用言語の発

固有名詞の取り扱いにみる国際理解

音に倣うか、それとも、英語式に発音すべきか、という問題である。英語圏の人名、地名の場合にも、その発音が日本語の発音とかなり違うものが多い。

文法のまとめや練習問題の箇所が登場する地名は限られている。これは、その箇所を設けた目的が、言語そのものの使い方を学習させたり理解させることなので、知名度が高いものを用いているからであろう。見方を変えれば、学習者にとって知名度の高い地名が極少数であるとも言える。社会科の知識の乏しさゆえであろうか。しかし、これを考慮しても、語学教科書の教科書で日本語表記だけの人名、地名を用いる根拠が、筆者には今一つ不明である。

英語以外の外国語の取扱いは、全体的に、外国語科目として世界的に伝統があるヨーロッパの言語を中心として、アジアの言語を取り上げる傾向にある。中国語は、6種類中5種類の教科書が取り上げ、その数はフランス語に次いで2番目に多い。しかし、その他のアジアの言語は、3言語をそれぞれ1種類が取り上げているに過ぎない。これは、教科書の内容が欧米中心であれば、当然とも言える。また、ヨーロッパの言語の方が、学習者には従来から馴染みがあるからであろう。

高校が開設する英語以外の外国語科目も、教科書と同様の傾向にある。しかし、開設校数では、1位が中国語で、朝鮮・韓国語が3位と僅差で4位である(2の(2)を参照)。開設校数は少ないが、教科書の取り扱いに比べ、より国内の事情を反映している。1996年の外国人登録令による登録外国人の総数に占める割合は、朝鮮・韓国：46.4%、中国：16.5%、ブラジル：14.3%、フィリピン：6.0%、アメリカ：3.1%、ペルー：2.6%、その他：6.3%である(国際人流 8)。

教科書によっては、学習者の関心が向きやすいように状況を身近な国内に設定して、英語圏/ヨーロッパ以外の外国人留学生が登場させている。しかし、その出身国は、日本との経済・技術協力の関係が深い国で、日本にやって来る留学生の数が必ずしも多くはない国である。また、取り上げる教科書が多い中国語は、国連の公用語であり、いわゆる大国の言語である。教科書の言語の取扱いは、基本的に、言語の世界的な有用性と国の対外事情を重視する傾向にあると言える。

風習/祭礼行事は、筆者の予想以上に、取り上げられている数が少なかった。もっとも、この調査項目は、文化の一部を形成するが、日常生活の根幹を形成する文化とは言えない部分である。

現状では、開設される英語以外の外国語科目の種類も開設校数も少ない。その状況で、英語科目において「国際理解」のためにどのような教育が行えるのか。この問題に関して、佐野は、基本的に英語圏の文化理解を中心に指導し、可能な限り日本や第3の文化と対比して生徒が自ら異文化に対応する力を延ばしていくこと、つまりcultural awarenessの育成が最終的な目標であると述べている(a 32, 69:b 8-10)。しかし、今回調査した固有名詞を目の前にすると、どれだけ応用が効くcultural awarenessを育成できるのか疑問が湧く。

英語科目で欧米文化を中心にその他の文化を可能な限り扱うとしても、調査結果に現れているように、その内容は質量共に限られる。また、多くの学習者にとって、多少なりとも馴染みのある異文化は欧米文化である。その情報の断片は、学習者の周りに散在している。この状況で育成されるcultural awarenessは、欧米文化への偏向を前提とせざるを得ない。もっとも、どの方法をとっても、現実の世界ではその偏向を逃れる手立てはないとも言える。しかし、その偏向をより緩和させる方法として、英語を民族語として学習する従来の方法をベースとするより、国際共通語として学習する方法が検討されてもいいのではないだろうか。調査で使用した教科書にも、英語圏の文化に限定せず、特定の話題に関して複数の文化を比較する方法を採用しているものがあつた。この方法も含め、英語圏の特定の文化に傾倒しない扱いがどの程度可能なのか、その可能性の検討が筆者の今後の課題である。

注

- 1 頻出度とは、この場合、特定の名前が使用されている課数の数値である。同一の名前が同じ課の中で数回使用されていても、1回と数えた。追加教材が挿入されている場合には、その前の課に付属する箇所と見なし、リーディング教材が別枠になっている場合には、これを通常の課と見なし数に加えた。各教科書の課の総数は以下の通りである。

教科書を構成する課の総数*

GI: 14 (11+3), II: 14 (10+4); HI: 14 (12+2), II: 12 (10+2)
 MI: 14 (12+2), II: 13 (12+1); PI: 13, II: 12
 UI: 15 (12+3), II: 12 (11+1); VI: 18 (16+2), II: Step One 7 (6+1)
 Step Two 7 (6+1)

*課の総数(目次の課数+リーディング教材)

- 2 姓名の提示順序は、文化によって異なる。また、相手に呼びかける時に使用する名前も、文化によって、first name, last name,あるいはその両方の場合などがある。教科書の人名の扱いは、基本的に、英語圏の慣例に倣っているが、中国系の名前に関しては、中国系文化圏の慣例に倣い、姓名の両方あるいは苗字を用いている。したがって、first nameのデータ内容に不備が生じるため、中国系の苗字に限って、「First Name」の範疇に入れた。教科書には、Li / Li Wong, Mei Lingが登場している。なお、日本人の場合には、英語圏の慣例に倣い、基本的にfirst nameを用いているが、年長者には苗字を用いている。また、1種類の教科書が、日本人の姓名を日本式の順序で提示している。
- 3 Englandは、国か地域か不明な場合、「国」に分類した。New Yorkは、CityかStateの判別ができない場合が多かったが、いずれも「その他の地名」に分類されるため、その区別をせず、一括して処理した。

引用文献

- 佐野政之, 水落一朗, 鈴木龍一. 1995 a 「異文化理解のストラテジー」東京:大修館書店.
- 佐野政之. 1995 b 「英語教育で行う異文化理解教育の考え方」『英語教育』10月号. 東京:大修館書店.
- 清水和彦, 赤尾勝巳, 新井浅浩, 伊藤稔, 佐藤春雄, 八尾坂修. 1996. 『教育データランド'96-'97』東京:時事通信社.
- 宮崎裕治. 1996. 『英語教科書解題』東京:近代文芸社.
- 「目で見える英語教育」『現代英語教育』1月号. 1994. 東京:研究社出版.
- 『国際人流』第125号. 1997. 東京:財団法人入管協会.